

ら	れ	て	い	た	。	ま	た	、	A	社	の	経	営	課	題	を	早	期	に	実	現	す	る	た	
め	、	4	月	か	ら	の	運	用	開	始	が	絶	対	条	件	で	あ	っ	た	。					
1	、	2	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	メ	ン	バ	の	構	成											
	今	回	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	メ	ン	バ	構	成	は	、	以	下	の	と	お	り	で	あ	る
	。	私	の	部	署	の	メ	ン	バ	だ	け	で	は	要	員	が	不	足	す	る	こ	と	、	今	回
	必	要	と	す	る	W	e	b	の	開	発	技	術	が	不	足	し	て	い	る	こ	と	か	ら	協
	力	会	社	で	あ	る	J	社	に	請	負	契	約	で	委	託	し	た	。						
(1)	私	の	部	署																			
	こ	れ	ま	で	A	社	の	シ	ス	テ	ム	開	発	を	多	く	手	が	け	業	務	知	識	は	豊
	富	な	ベ	テ	ラ	ン	と	、	入	社	後	2	～	3	年	目	の	若	手	メ	ン	バ	で	構	成
	し	た	。	経	験	豊	富	な	メ	ン	バ	は	、	メ	イ	ン	フ	レ	ー	ム	開	発	は	問	題
	な	い	が	W	e	b	開	発	の	経	験	は	乏	し	い	。									
(2)	J	社																					
	こ	れ	ま	で	も	A	社	の	シ	ス	テ	ム	開	発	を	手	が	け	て	き	た	メ	ン	バ	と
	、	今	回	新	た	に	追	加	し	た	W	e	b	開	発	の	豊	富	な	経	験	と	知	識	を
	も	つ	メ	ン	バ	で	構	成	さ	れ	た	。													

2	.	私	が	実	施	し	た	動	機	付	け	と	メ	ン	バ	の	反	応							
2	.	1	メ	ン	バ	に	対	し	て	行	っ	た	動	機	付	け	の	内	容	と	そ	の	方	法	
		私	は	こ	の	よ	う	な	厳	し	い	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	の	目	標	を	確	実	に	達
成	す	る	た	め	に	は	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	メ	ン	バ	が	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	に	
積	極	的	に	参	加	し	、	高	い	生	産	性	を	発	揮	す	る	こ	と	が	必	要	で	あ	
る	と	考	え	た	。																				
		ま	ず	私	は	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	の	立	ち	上	げ	後	に	、	今	回	の	プ	ロ	ジ
ェ	ク	ト	の	目	標	で	あ	る	以	下	の	点	に	つ	い	て	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	メ	
ン	バ	全	員	に	熱	心	に	訴	え	、	認	識	を	共	通	に	し	た	。						
(1)	1	0	%	コ	ス	ト	削	減	と	納	期	厳	守	の	目	標							
		今	回	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	は	機	能	数	か	ら	考	え	る	と	、	工	数	面	で
通	常	よ	り	も	約	1	0	%	程	度	厳	し	い	数	字	と	な	っ	て	い	る	。	こ	れ	
は	、	4	月	か	ら	の	サ	ー	ビ	ス	開	始	が	絶	対	条	件	で	あ	る	た	め	、	こ	
れ	ま	で	A	社	シ	ス	テ	ム	の	開	発	を	や	っ	て	き	た	メ	ン	バ	を	中	心	に	
構	成	し	、	生	産	性	を	1	0	%	高	く	見	積	も	っ	た	か	ら	で	あ	る	。	A	
社	の	経	営	状	況	を	考	慮	す	れ	ば	、	こ	の	数	字	を	超	え	る	交	渉	は	困	

難	で	あ	っ	た	。																				
(2)	W	e	b	開	発	の	ス	キ	ル	向	上												
	こ	れ	ま	で	私	の	勤	務	す	る	会	社	は	、	A	社	の	メ	イ	ン	フ	レ	ー	ム	
開	発	を	中	心	に	行	っ	て	き	た	が	、	近	年	U	N	I	X	を	中	心	に	W	e	
b	シ	ス	テ	ム	へ	の	移	行	が	急	激	に	進	ん	で	い	る	。	W	e	b	シ	ス	テ	
ム	へ	の	移	行	に	対	応	す	る	た	め	、	早	急	な	W	e	b	開	発	の	ス	キ	ル	
向	上	が	求	め	ら	れ	て	い	る	。															
	し	か	し	私	の	部	署	の	ベ	テ	ラ	ン	は	、	W	e	b	開	発	に	興	味	を	持	
っ	て	い	る	が	、	新	技	術	の	習	得	に	自	信	が	持	て	な	い	で	い	た	。	そ	
の	上	、	こ	れ	ま	で	の	開	発	に	比	べ	て	、	か	な	り	厳	し	い	目	標	に	対	
し	て	不	満	の	声	も	上	が	っ	て	お	り	、	ベ	テ	ラ	ン	の	モ	チ	ベ	ー	シ	ョ	
ン	は	低	下	し	て	い	た	。	私	は	こ	の	ま	ま	の	状	態	で	は	、	通	常	よ	り	
厳	し	い	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	を	遂	行	す	る	こ	と	は	困	難	で	あ	る	と	考	え	、
ベ	テ	ラ	ン	を	重	点	的	に	、	個	別	面	談	を	行	う	こ	と	に	し	た	。			
	な	ぜ	な	ら	ば	モ	チ	ベ	ー	シ	ョ	ン	の	低	い	ベ	テ	ラ	ン	を	中	心	に	、	
不	安	や	不	満	を	ヒ	ア	リ	ン	グ	し	原	因	を	改	善	す	る	こ	と	で	、	責	任	

感	や	一	体	感	を	醸	成	し	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	に	積	極	的	に	参	加	し	て	
も	ら	う	こ	と	を	期	待	し	た	か	ら	で	あ	る	。	ま	た	、	今	回	は	個	人	的	
な	不	安	や	不	満	を	ヒ	ア	リ	ン	グ	し	た	か	っ	た	の	で	、	他	の	メ	ン	バ	
が	い	る	と	話	に	く	い	た	め	、	個	別	面	談	と	し	た	。							
	一	方	J	社	は	、	チ	ー	ム	リ	ー	ダ	と	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	目	標	を	共	有	
し	た	後	、	そ	れ	を	メ	ン	バ	に	十	分	に	浸	透	さ	せ	る	よ	う	に	伝	え	た	。
な	ぜ	な	ら	、	請	負	会	社	で	あ	る	J	社	の	動	機	付	け	は	、	チ	ー	ム	リ	
一	ダ	に	依	存	す	る	こ	と	が	大	き	い	と	考	え	た	か	ら	で	あ	る	。			
2	、	2	動	機	付	け	を	行	っ	た	時	の	メ	ン	バ	の	反	応							
	今	回	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	メ	ン	バ	の	力	量	や	目	標	意	識	も	異	な	る	
た	め	、	個	別	面	談	で	の	反	応	も	ま	ち	ま	ち	で	あ	っ	た	。					
	私	は	ベ	テ	ラ	ン	に	対	し	て	は	、	W	e	b	開	発	等	の	新	技	術	を	習	
得	し	、	A	社	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	目	標	を	達	成	す	る	こ	と	は	、	今	後	
の	キ	ャ	リ	ア	形	成	に	も	有	効	で	あ	る	こ	と	、	技	術	取	得	の	た	め	の	
適	切	な	技	術	支	援	を	行	っ	て	い	く	旨	を	伝	え	、	理	解	を	得	る	よ	う	
に	訴	え	た	。	私	の	言	葉	に	対	し	、	最	初	は	不	満	だ	っ	た	ベ	テ	ラ	ン	

も	プ	ロ	ジ	エ	ク	ト	の	目	標	達	成	の	た	め	の	自	分	の	役	割	を	理	解	し	、
一	体	感	・	責	任	感	が	醸	成	さ	れ	た	様	子	で	あ	っ	た	。						
	私	の	部	署	の	若	手	メ	ン	バ	は	、	こ	れ	ま	で	の	比	較	的	単	調	な	繰	
り	返	し	で	あ	る	メ	イ	ン	フ	レ	ー	ム	開	発	に	、	今	後	の	キ	ャ	リ	ア	形	
成	に	不	安	を	持	っ	て	い	た	。	私	は	今	回	の	プ	ロ	ジ	エ	ク	ト	は	、	W	
e	b	開	発	ス	キ	ル	向	上	の	よ	い	機	会	で	あ	り	、	新	し	い	技	術	も	積	
極	的	に	取	り	入	れ	て	い	く	旨	を	話	し	た	。	若	手	メ	ン	バ	は	、	か	な	
り	厳	し	い	目	標	で	あ	っ	た	に	も	関	わ	ら	ず	、	新	し	い	分	野	で	あ	る	
今	回	の	W	e	b	開	発	に	は	挑	戦	的	に	取	り	組	ん	で	い	き	た	い	様	子	
で	あ	っ	た	。																					
	一	方	J	社	の	メ	ン	バ	は	、	W	e	b	開	発	に	詳	し	い	新	規	メ	ン	バ	
の	追	加	に	よ	り	、	新	技	術	を	利	用	し	た	W	e	b	開	発	に	も	積	極	的	
な	様	子	で	あ	る	こ	と	を	、	チ	ー	ム	リ	ー	ダ	と	確	認	し	た	。				

3	.	私	が	実	施	し	た	動	機	付	け	の	維	持	・	強	化	の	活	動	と	結	果		
3	.	1	動	機	付	け	の	維	持	・	強	化	の	観	点	と	行	動							
		プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	立	上	げ	に	実	施	し	た	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	目	標	の	共
有	と	メ	ン	バ	と	の	面	談	に	よ	り	、	メ	ン	バ	の	動	機	付	け	が	で	き	た	
が	、	そ	れ	だ	け	で	は	不	十	分	で	あ	る	。	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	進	行	中	も	
メ	ン	バ	の	貢	献	の	状	況	を	見	な	が	ら	、	動	機	付	け	の	内	容	を	強	化	
す	る	必	要	が	あ	る	と	考	え	た	。														
(1)	一	体	感	の	観	点																	
		私	は	メ	ン	バ	の	貢	献	の	状	況	を	見	る	一	つ	と	し	て	、	会	議	で	の
発	言	に	注	目	し	た	。	な	ぜ	な	ら	、	会	議	で	の	発	言	の	頻	度	や	内	容	
に	よ	り	メ	ン	バ	の	モ	チ	ベ	ー	シ	ョ	ン	が	判	断	で	き	る	と	考	え	た	か	
ら	で	あ	る	。	議	題	が	W	e	b	開	発	の	技	術	面	の	話	に	な	る	と	、	ベ	
テ	ラ	ン	社	員	の	発	言	が	減	り	、	若	手	メ	ン	バ	と	J	社	メ	ン	バ	で	行	
う	こ	と	が	多	く	な	っ	た	。																
		そ	こ	で	私	は	、	W	e	b	開	発	に	お	け	る	技	術	情	報	を	共	有	す	る
た	め	の	、	定	例	の	技	術	勉	強	会	を	開	催	し	た	。	W	e	b	開	発	に	詳	

し	い	メ	ン	バ	が	中	心	と	な	り	、	各	自	テ	ー	マ	を	持	ち	寄	り	自	由	に	
議	論	す	る	よ	う	に	し	た	。																
(2)	責	任	感	の	観	点																	
ま	た	私	は	、	メ	ン	バ	の	抱	え	る	タ	ス	ク	と	そ	の	進	捗	状	況	に	も		
注	目	し	た	。	な	ぜ	な	ら	、	タ	ス	ク	の	進	捗	状	況	に	よ	り	メ	ン	バ	の	
作	業	範	囲	を	拡	大	し	、	責	任	感	を	よ	り	強	く	し	た	か	っ	た	か	ら	で	
あ	る	。	特	に	若	手	メ	ン	バ	は	、	新	技	術	の	習	得	に	熱	心	で	あ	る	こ	
と	か	ら	、	開	発	担	当	す	る	機	能	を	拡	大	す	る	こ	と	で	責	任	感	が	強	
く	な	り	、	モ	チ	ベ	ー	シ	ョ	ン	が	向	上	す	る	と	考	え	た	か	ら	で	あ	る	。
3	.	2	動	機	付	け	の	維	持	・	強	化	の	結	果										
技	術	勉	強	会	の	開	催	は	原	則	自	由	参	加	と	し	て	い	た	た	め	、	最		
初	の	頃	は	、	私	の	部	署	の	ベ	テ	ラ	ン	は	欠	席	が	多	か	っ	た	。	私	か	
ら	声	を	か	け	て	出	席	を	促	す	と	、	徐	々	に	参	加	す	る	よ	う	に	な	っ	
た	。	途	中	か	ら	は	、	ベ	テ	ラ	ン	が	A	社	シ	ス	テ	ム	の	業	務	知	識	の	
講	義	を	担	当	し	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	全	体	の	技	術	レ	ベ	ル	向	上	に	結	
び	付	き	、	生	産	性	の	向	上	に	寄	与	し	た	。										

プ	ロ	ジ	エ	ク	ト	開	始	直	後	の	進	捗	状	況	は	遅	延	気	味	で	あ	っ	た	
が	、	設	計	の	中	盤	を	越	え	る	こ	ろ	か	ら	、	特	に	若	手	メ	ン	バ	の	進
捗	が	進	ん	で	き	た	。	こ	の	た	め	私	は	リ	ー	ダ	と	メ	ン	バ	と	面	談	し
メ	ン	バ	判	断	で	進	め	ら	れ	る	作	業	を	確	認	し	、	開	発	担	当	の	範	囲
を	拡	大	さ	せ	る	よ	う	指	示	し	た	。	具	体	的	に	は	、	W	e	b	画	面	設
計	は	若	手	メ	ン	バ	を	中	心	に	進	め	る	こ	と	に	な	っ	た	。	こ	れ	に	よ
り	メ	ン	バ	に	強	い	責	任	感	が	生	ま	れ	、	動	機	付	け	の	内	容	を	強	化
す	る	こ	と	が	で	き	た	。																
今	回	の	プ	ロ	ジ	エ	ク	ト	は	、	納	期	・	コ	ス	ト	共	に	厳	し	い	数	字	
で	あ	っ	た	に	も	関	わ	ら	ず	、	予	算	内	で	工	期	通	り	に	完	了	し	た	。
そ	の	意	味	で	は	、	今	回	私	が	実	施	し	た	動	機	付	け	の	行	動	は	、	成
功	し	た	と	言	え	る	。																	

以上

論文添削結果

2010.02.19 (株) テレコムリサーチ
添削者：佐藤 創

【添削情報】

論文提出者：●●●●●様
問題：平成21年度 問1

【免責事項・その他】

本添削結果は、添削者個人の判断によるものであり、所属する会社や組織を代表する意見ではございません。また、本添削結果に即したからといって試験の合格を保証するものではありません。本添削結果の使用の結果生ずるあらゆる損害や被害について添削者は免責されるものとします。本添削結果の著作権は添削者に帰属します。

[目次]

1. 論文見出し構成の例
2. 論述すべき内容
3. 添削結果
4. 講評
 - (1) 添削結果の根拠について
 - (2) 総評
 - (3) 講評の詳細

1. 論文見出し構成の例

以下に添削者が考える、本問題の見出し構成の例を示します。

1. 私が携わったプロジェクトの概要
 1. 1 プロジェクトの特徴とプロジェクトの目標
 1. 2 プロジェクトのメンバ構成
2. プロジェクト立上げ時の動機付け
 2. 1 動機付けの内容と方法
 2. 2 動機付けした時のメンバの反応
3. プロジェクト遂行中の動機付けの維持・強化
 3. 1 維持・強化の観点
 3. 2 維持・強化の実行内容及び評価

2. 論述すべき内容

以下に添削者が考える、問題文から読み取れる題意と、求められる論述内容について、1. 論文見出し構成例に沿って示します。

見出し	論述すべき内容	備考
1. 1	①プロジェクトの特徴、あなたの立場、求められる要件などを明記。 ・プロジェクト概要、プロジェクト体制 ・工期、工数、契約内容、担当工程など ・あなたの立場・役割 ・プロジェクトの制約事項・条件など ②メンバ全員で共有し、また個人目標とマッチングできるようなプロジェクト目標を記述すること ⇒Q・C・D・品質、技術スコープや要件などの目標であること。	
1. 2	①メンバの力量（経験年数、技術スキル・ヒューマンスキルなど）にも言及したメンバ構成について述べられていること ⇒動機付けする場合も、メンバの力量と無関係に論ずることはできない。2.1節においても矛盾のないように論述する必要がある。	
2. 1	①プロジェクト立上げ時に、プロジェクトの目標をメンバ全員と共有したことについて述べられていること。 ②メンバのスキルや経験などの力量に応じた動機付け内容となっていること ⇒メンバの個別性（役割・力量など）を踏まえた動機付けをしていること。 ③動機付けの内容が、プロジェクト目標にリンクする形で行われていること ⇒プロジェクト目標の達成に貢献しない動機付けでないこと。 ④動機付けの方向性として、メンバー一人一人の役割と個人目標を相互確認し、プロジェクト目標とどのように関わっているかを明らかにしていること ⑤動機付けの方法（例：面談など）について述べていることと、動機付けの方法が適切であること	

2. 2	①プロジェクト目標と求められる役割について、個人目標と一致するという方向性で動機付けられている論述であること ⇒方向性としては、個人がプロジェクト目標の達成にどのように関わるのかを理解することで、与えられた役割や個人目標を納得し、動機付けられる、という内容であること。	
3. 1	①メンバの貢献の状況を踏まえた動機付けの維持・強化をしていること ⇒つまり、メンバの貢献が弱い、など、動機付けが再度必要な状況に応じた対応であること。 ②動機付けの観点について、「責任感・一体感・達成感」などのキーワードを用いて説明していること。また、この観点で動機付けの維持・強化を行うことが適切であると判断できる内容であること ③維持・強化の内容が、設問イで述べた内容と一致していること ⇒維持・強化なので、新たな観点での動機付けを述べるべきではない。	
3. 2	①動機付けの維持・強化の具体的な実行内容（動機付けの方法）と、その結果について具体的に述べられていること ②維持・強化の内容が、設問イで述べた内容と一致していること ⇒維持・強化なので、新たな観点での動機付けを述べるべきではない。	

本問題は、「動機付け」という幅広い範囲からの出題です。現場では、それこそ一筋縄ではいかないため様々な方策がとられています。それだけに論述の幅が広いテーマです。

しかし、問題文では比較的明確なストーリーが示されています。①プロジェクト目標の全員での共有、②メンバと個別の面談を通じてのプロジェクト目標や役割の認識の一致化を通じた動機付け、③プロジェクト遂行過程での動機付けの維持・強化、といったストーリーです。

日ごろ現場で経験のある方は、自身の経験をこのストーリーにどのように当てはめていくか、というところが1つ目のポイントです。2つ目のポイントは、「動機付け」というテーマだと、経験に偏った論述になりがちですので、人的資源管理の知識を引用しつつ、知識と経験の両方を訴求する論文にする点です。

以上を総合的に考えると、「日ごろの経験」と「問題文で求められている内容」とのギャップが大きい可能性が高いので、難易度はやや高い問題ではないかと考えます。

3. 添削結果

添削者が考える論文評価結果を、A～Dランクに分けて示します。合格はAランクのみです。

評価ランク	内容	判定
A	合格水準にある	合格

※A～Dランクの評価内容は以下の通りです。

- A：合格水準にある
- B：合格水準にあと一步である
- C：内容が不十分である
- D：出題の要求から著しく逸脱している

添削者が考える、各種の詳細な評価項目について、それぞれA～Dランクを示します。

評価項目	評価基準	評価ランク	内容
題意の適切な盛り込み	設問や問題文で求められる題意が適切に盛り込まれていること	A	合格水準にある
論理性	論述に根拠があり、論理的な内容になっていること <ul style="list-style-type: none"> ・ 行動や考えの背景として、経験や知識、分析結果に裏付けられた根拠が論述されていること ・ 行動した結果やプロジェクトの顛末を書きただけの論文になっていないこと ・ 論述が、具体的・定量的で、かつ論理的であること 	A	合格水準にある
プロマネの創意工夫	プロジェクトマネージャとしての創意工夫・判断基準が盛り込まれていること <ul style="list-style-type: none"> ・ プロジェクトマネージャらしい総合的な考え方（創意工夫）を論述していること ・ プロジェクトマネージャの役割や責任を理解した上で、適切な行動等について論述していること ・ 専門用語などは本来の意味や目的を理解して用いていること 	A	合格水準にある
文章表現	文章表現が適切で、かつ理解しやすい文章であること <ul style="list-style-type: none"> ・ 論文としてふさわしい文章表現であること ・ 文章の内容が理解しやすいこと ・ 助詞などの用法に誤りがないこと ・ 誤字脱字がないこと 	A	合格水準にある

4. 講評

添削者が考える講評について示します。

(1) 添削結果の根拠について

評価ランクがAである理由は以下です。

- ①題意を適切に論文に盛り込んでいる
- ②プロマネとしての創意工夫、行動の根拠などが適切に述べられている
- ③相手に伝わりやすい文章表現である

(2) 総評

おめでとうございます。当方の添削ではAランクであると判断致します。

合格水準の論文は、題意を取り込んでいることはもちろんですが、論文としても、①読み手の疑問に全て答え、②かつ読みやすく理解しやすい、という特徴を持っていると思います。本論文も、読み手が知りたい内容を全て論述しており、かつ読みやすく理解しやすい文章だと思います。

本番試験でのご健闘を祈念させていただきます。

なお、論文中でいくつか気になった点がありますので、それを(3)に指摘させていただきます。

(3) 講評の詳細

(ア)

設問ア、1ページ目のプロジェクト目標にて、「(1) 10%のコスト削減と納期厳守」とありますが、コスト削減が、直前の論述にあるように、A社の業務効率化による業務コスト削減なのか、本プロジェクトの開発コストの削減なのか判断しにくいので、「開発コスト」などのように明確に示したほうが、より相手に伝わると思います。

(イ)

「2. 2 動機付けを行った時のメンバの反応」において、ベテランとの動機付けの中で、ベテラン社員が抱えている不満の原因については触れられていませんでした。2. 1 節の論述の中では、個別面談を行う目的として「不安や不満をヒアリングし原因を改善することで、責任感や一体感を醸成し・・・」とありますので、個別面談の中で、ベテラン社員の抱える不満の原因が明確になるのかと思って読んでいくと、それが登場しません。

実際には、2. 1 節に「新技術の習得に自信が持てない」、「今までの開発に比べて厳しい目標が不満」などと、原因相当のものが述べられていますので、論文全体としては、つじつまは合っていますので特別減点されるような箇所ではないとは思いますが。

論述の流れに沿って論じるという点についてご留意されると良いと思います(原因特定のための面談、という流れなので、面談の中で原因が明らかにされるのが自然な流れだと思います)。

(ウ)

設問ウ、1 ページ目の9 行目にて、「私はメンバの貢献の状況を見る一つとして」とありますが、「私はメンバの貢献の状況を見る一つの指標として」としたほうが分かりやすい表現だと思います。

(エ)

「3. 2 動機付けの維持・強化の結果」において、「メンバの判断で進められる作業を確認し・・・」と、職務充実にに関する内容が述べられていると読み取れる箇所があります。しかし、実際には、3. 1 節では職務充実ではなく、職務拡大の施策を打っていますので、論述が少しかみ合わない印象を受けます。この点を矛盾なく修正しておくと思いしました。

また本節は、動機付けの維持・強化の結果について述べる箇所ですが、以下の論述は動機付けの維持・強化を実施している内容も含んでいます。この点の論述は冗長ですので、結果についての論述だけに修正したほうが良いと考えます。

対象文章：

プロジェクト開始直後の進捗状況は遅延気味であったが、設計の中盤を越えるころから、特に若手メンバの進捗が進んできた。このため私はリーダーとメンバと面談し、メンバ判断で進められる作業を確認し、開発担当の範囲を拡大させるよう指示した。具体的には、Web 画面設計は若手メンバを中心に進めることになった。

さらにここでは、「これによりメンバに強い責任感が生まれ、動機付けの内容を強化することができた」と述べられていますが、メンバのどんな態度や成果を見て、そのように判断したのかの根拠が述べられていませんでした。例えば、「メンバが自発的に勉強会を開催したり、打合せでも積極的な発言が増えたりするなど、プロジェクトに前向きに取り組んでいる姿勢が伺えた。このため、メンバに責任感が醸成され、動機付けの内容を強化できたと考えている」などのように、根拠についても示せるとより良い論文になると思います。

以上